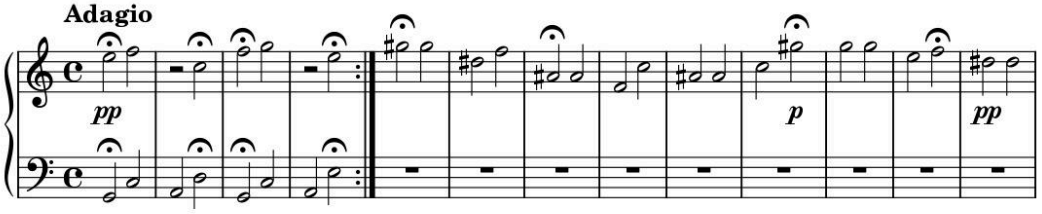
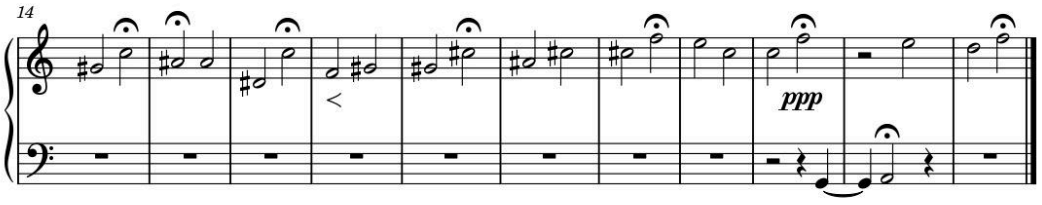
刻

あまた多くの宇宙を律する時間の滝。
とうとうと、いく段にも落ちながら、源流を知ることもできない高みから
目を凝らしても暗闇に見えない落ちてゆく先まで。
守護する者たちがいる。

流れ落ちる力に舞い上がる水煙。
それらを髪に受けながら、石畳の水門の上を歩いていた彼は
ふと足を止めると、瀑布の一点に視線を止める。

微かにゆらめく糸のような光が、水の面に現れ、紅く変色しながら流れに絡みつこうとする
と、その時
再び色が代わり、穏やかな乳白色、そして若葉の色から水の色へと移り消えた。

ああ。
彼女が動いたか。
悲しみ・苦しみ・絶望の淵を、自ら出ようと振り絞る者に
あのものは、間にあったか。

悲鳴は不安定ながらも癒え消え、
巨大な流れは、変わることなく水煙をあげ、深い緑の木々の中に消える。

ゆっくりと、時の振り子のように旋律を始め
その中に生きるものの足どりの軽さで主旋律に
全体的に静かに